

パブリックディプロマシーとしての翻訳活動

～日本とアラブの文化外交をめぐる～

アルモーメン アブドーラ

(東海大学)

ここ数年、日本とアラブ諸国の経済または科学技術の交流が徐々に深まっていくにつれて、日本人とアラブ人の接触する機会が増えている。ただ、確かにそうなのだが、言語と文化の壁により、互いの社会の情報を完全に理解できず、受け入れられないことがある。互いの偏見や誤解、ステレオタイプといった障壁によって対立が蔓延する国際社会という文脈を背景に注目を集めているのが「文化外交」とも訳されるパブリック・ディプロマシー(public diplomacy) というものである。

この種の外交の中心となるのは必ずしも政府だけでなく、政府と民間が連携して取り組むことでより大きな効果を生み出すとされている。また、パブリック・ディプロマシーの活動分野も様々だが、その中で特に注目したいのはパブリック・ディプロマシーにおける翻訳活動というものだ。翻訳は国と国や、民族と民族の間の文化交流や知識移転の橋であり、人類の進歩の敷石と階段と言える。こうした翻訳という古くて新しい手段のパブリック・ディプロマシーの可能性や、日本とアラブの文化発信のプラットフォームとしての翻訳活動の現況とその可能性について考えてみたい。

日本とアラブ世界を巡る翻訳活動の現況

翻訳によるいわゆるパブリック・ディプロマシー(文化外交)や文明開化は今始まった話ではない。かつて日本は、明治維新以後「広く世界に知識を求め」、ひたすら「追いつけ、追いこせ」と欧米諸国の文化や技術を営々として翻訳し続け、日本の近代化、工業化に役立ててきた。また、かつてのアラブ・イスラーム文明では、カリフ・マムーンが、アラブ各地から翻訳者を集めて、ギリシャ、インド、ペルシャの古典から医学、哲学、数学、物理学など、人文科学と自然科学の知識を次々にアラビア語に翻訳させ、これらの知識の吸収、融合によって中世のアラブの黄金文明が築きあげられた。

そして、文明が周り、このアラブ人による華麗な『翻訳活動』がやがて、ヨーロッパの文芸復興として開花し、それが現代の科学技術の礎石となったのである。こうしてみると、今の日本の科学技術も、中世アラブ世界の知識の集積の恩恵を受けていると言える。

最近、アラブの国々やその社会の変化が進む中、アラブ人は、日本をもっとも知りたいと日本の考え方や価値観に関する情報をしきりに求める場面が増えている。当然ながら、そこでは言語による壁をいかに乗り越えるかが大きな課題となるが、日本を理解していくための翻訳活動が組織的に行われているとはまだまだ言えない状況だ。

そもそもいかなる翻訳活動においてもその活動自体が成り立つには、以下のように 3 つの要素

が必要だといわれている。

1) 体系的な取り組みと組織、2) 翻訳者の人材育成、3) 両言語による相互的翻訳研究

しかし、日本語とアラビア語による翻訳活動の現況を見ると、この3つすべてが欠如している状況である。第一に、これだけ日本とアラブの長い交流活動があるにもかかわらず、日本語とアラビア語の翻訳活動を担う専門組織はひとつもない。また、翻訳者の育成も行われていない。加えて、日本語とアラビア語の翻訳研究はほとんど行われていない状況だ。また、すでに日本語またはアラビア語に翻訳されている文献に関する総合的かつ明確なデータも存在しない。

また、当方が調べたところ、アラビア語から日本語へ翻訳された文献、または日本語からアラビア語へ翻訳された翻訳書のほとんどは、文学や文化などといったエキゾチックな日本か、あるいは、高度な専門的書物が目立つ。そして、アラブ世界の多くの人々が日本に対して本当に知りたいと思っている、現代日本の社会や日本人の普段着の生活が伝わる本や、技術移転に必要な基礎的な科学技術の本は極めて僅かだ。

翻訳の仕事には、産業翻訳やメディア翻訳などから出版翻訳まで様々な分野がある。また、アラビア語から日本語への翻訳なのか、日本語からアラビア語への翻訳なのかによって、求められるスキルは異なる。翻訳者養成では、このような様々な分野、ニーズに対応できるよう、多様な育成プログラムが必要となっている。

アラブ地域の例ではないが、2008年には日本から中国への特許出願が40,000件を超える中で、日中知財翻訳者の不足は深刻な状況にあり、多くの中国関係者から翻訳者の育成が求められていた。その結果、日本知的財産翻訳協会と日本貿易振興機構の協力の下で日中知財翻訳者育成事業が開設されることになった。

優れた翻訳家を発掘、育成することにより、国やその民族の文化やその思想、技術などを世界に発信する土壌を醸成することにつながることに異議を唱える人はいない。もちろん、日本とアラブ地域の場合もその例外ではない。しかし、残念ながら、現在では、日ア語またはア日語のプロの翻訳者を育てるための教育は、まったく行われていない状況にあると言っていいたいだろう。過去には大学の先生や元外交官など専門分野や仕事の面でアラブ地域に関係していたOBの人たちが日ア翻訳の中心だった。そもそも現在では翻訳者(日ア語)を目指す人すらあまりない状況である。

日本語とアラビア語両言語の翻訳者育成のための教育を行い、また、そのノウハウを、後進を指導するという目的に適した形でまとめられることが人材育成を考えていく上で重要な作業となる。そこで、これまでの議論を踏まえて以下に具体的な提言をしたい。

翻訳活動によるパブリック・ディプロマシーの促進に向けた取り組み作りへの提言

1. 国内外を超えた、日本とサウジアラビア新時代の共同翻訳プロジェクトの新設(双方による研究活動の支援策や運営などに関する戦略やビジョンの提案と実施)

- (1)「アラブの現代文芸」の翻訳出版事業 (2)「ジャパニーズ・チャレンジ」の翻訳出版事業
2. 日本とアラブ地域(サウジアラビア)の政府機関及び出版社、それに翻訳者の三者による連絡会議や交流の場の強化。
3. 日本やアラブ地域の大学や教育機関内で、翻訳者育成のための専門課程やプログラムの強化(「日本語とアラビア語翻訳」を専門とする専門課程新設やカリキュラムの充実化や専門課程などによる講座提供)。
4. 情報発信プロダクション:「アラブ・ハウス The Arab House」立ち上げプロジェクト
日本で、アラブ世界を身近にしてくれる空間の実現が求められている現在においては、「アラブ・ハウス The Arab House」の誕生を立ち上げることで、教育とビジネスの両面から日本人とアラブ人を結ぶ橋渡しとして大きな役割を果たすことになるかと期待される。日本の世論の対アラブ世界のイメージとその実態に実証的な基礎を与えることを目指す点にアラブ・ハウスの特色がある。
5. 日本語とアラビア語の高度な辞典編纂や翻訳のノウハウの専門書の充実化、上級や専門講座によるアラビア語や日本語教育の充実化。

言語によるボーダーレスの実現への提言

日本とアラブの関係の百年の大計を作るために、言語によるボーダーレスの新時代の実現をめざすことが重要である。現在、アラブ・イスラーム世界は、非常に危機的な様相をはらんでいる。そして今や、アラブやイスラームに対する誤解や偏見が拡大し、また逆にアラブ人の日本の中東政策に対する厳しい見方が進んでいる。日本とアラブ世界が迎えた 21 世紀とは、単なる 20 世紀の延長ではない。過去・現在・未来を同時に生きなければならない、「複合の世紀」なのだ。これまでの日本とアラブ世界に関する議論が、過去中心、または未来中心の、どちらか片方の見解によってなされたとすれば、今後は、過去の中の未来、そして未来の中の過去を、同時に読み解こうと努力していかなければならないのだ。

過去の限定的な関係に学びながら、また、地平線の向こうに見える明るい未来を見通しながら、今日の日本とアラブ世界の中の文化的な関係の構築し、その諸問題を解いていかなければならない、新しい時代なのである。翻訳活動によるパブリック・ディプロマシーのその役割に大いに期待したい。

.....

【著者紹介】アルモーメン アブドラー (Almoamen Abdalla) 東海大学・国際教育センター准教授 エジプト・カイロ生まれ。日本語日本文学博士号を取得。元 NHK テレビ・アラビア語講座講師。主な著書に『日本語とアラビア語の慣用的表現の対照研究～比喩的思考と意味理解を中心に』(国書刊行会)、『地図が読めないアラブ人、道を聞けない日本人』(小学館)他。